

氏名	あお やま ひろ お 青 山 宏 夫
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 506 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	前近代地図の空間構成と地理的知識

論文調査委員 (主 査) 教授 金田章裕 教授 石川義孝 教授 杉浦和子

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代地図成立以前に日本で作製された地図を中心に、その表現法とそれによって再構成された地図空間の特質、および地理的知識や景観について考察したものである。直接認識できない広域空間を対象として理念的に描かれた地図と、日常的に体験しうる規模の現実的空間を対象とする地図とでは、表現の方法や内容が異なる点に留意して、前者の例として日本図を後者の例として中世絵図をとりあげ、これら2様の地図から前近代地図の特質の一端を探る。その構成は、序章「前近代地図研究のメソドロジー」、第一部「日本図のなかの想像力の世界」、第二部「地理的知識の継承と変容」、第三部「中世絵図の空間と景観」、第四部「中世絵図と境界」からなる。

序章では、前近代地図の研究方法について論じる。近代地図をも含めた地図全般の展望のもとに前近代地図を考察するために、近代地図学における地図の定義を参考にしつつ、地図化のプロセスにおいて空間変換と記号化という表現レベルと、媒体(素材)という物質レベルとに注目することが重要であることを指摘した。一方、地図史研究の問題点を踏まえて、前近代地図が空間変換と記号化に関して近代地図と大きく性格を異にしている点に注目して、前近代地図の構図と地図記号の分析を進めることの有効性と、空間認識や地理的知識等へいたる射程について論じた。

第一部は第1章～第3章および付論1からなる。ここでは、主として中・近世の日本図をとりあげ、そこに描かれた想像圏の土地と日本列島の形態に注目し、日本図の空間的特質やそれらに関する地理的知識の変容について論じる。とくに、日本図の構図や形態の問題をとりあげることによって、日本図のうえに再構成された地図空間すなわち空間変換の問題と国土観すなわち空間認識に論及する。

第1章「日本図の空間と地理的想像力—主として雁道の検討から—」では、日本北方に描かれた架空の土地「雁道」に注目して、その地図史の変遷とそれを支えた地理的想像力を検討することによって、「雁道」などの日本の周辺に描かれた異域や異界が日本図のなかで占める位置と果たす機能とをとらえ、中世日本図が中心と周縁からなる完結したコスモスという構造をもつことを明らかにするとともに、その近世的変容を論じた。従来、否定的にしか評価されてこなかった架空の土地について、それこそが中世日本図の特質であることも明らかにした。

第2章と第3章では、実在と架空の狭間にあった東方の〈夷〉と、南方の架空の土地「羅刹国」について論じる。第2章「列島のメタモルフォーゼと〈夷〉の変容」では、日本列島の形態と記載内容を追跡することによって国土表現が変質することを明らかにした。また、この変質は、近世以降の蝦夷に関する地理的視圏の拡充ともあいまって、東方の〈夷〉の変容と連動し、第1章で論じた中世日本図の構造から脱することを論じた。さらに、この〈夷〉の変容の過程においては、一時、南北に長大な蝦夷が描かれることがあるが、これを17世紀後半における蝦夷表現の特徴として別出した。

第3章「海のなかの川を越えて」では、八丈島が伊豆諸島で唯一黒潮を隔てた難所の島であり、かつ人の住む最南の地であるという地理的位置を指摘するとともに、江戸幕府撰日本図などの検討から八丈島が最南端の境界の島と認識されていたことを明らかにした。これによって、近世以降の「羅刹国」の変容過程とともに、八丈島がしばしば「羅刹国」に附会されることの背景を論じた。

付論1「鳥追い歌にみる異界と異域」では、鳥追い歌の詞章のなかに、外なる世界へ害鳥を放逐する文句がある点に注目し、これを異域・異界観を示すものとした。そのうえで、東日本の日本海側では佐渡やその先の鬼ヶ島へ、太平洋側では蝦夷やその先の鬼ヶ島へ追いやることを指摘し、日本の北方と東方の異域・異界観を考察する資料と位置づけた。

第二部は第4章～第6章および付論2と付論3がらなる。ここでは、日本図に盛り込まれた地理的知識およびそれと日本図の構図との関連について考察する。とくに、構図と地名の問題、地理的知識の系譜と変遷の問題を論じる。

第4章「想像の海から日本海へ」では、ユーラシア大陸と日本列島に囲まれた海域が、日本列島の形態認識の変化に連動して、16世紀以降、想像圏のなかにあった曖昧な海域からしだいに現実的な海域の認識にいたり、日本海が「発見」される過程をたどる。

第5章「日本海という呼称の成立と展開」では、こうした地理認識とその海域呼称の成立が表裏一体の関係にあることを確認したうえで、日本海という呼称が記載される現存最古の地図が1602年にペキンでイエズス会宣教師マテオ＝リッチによって作製された坤輿万国全図であり、かつその地図では当該海域が独立した海域として「発見」されていることを論証する。また、この地理認識と呼称の成立には、16世紀後半以降の東アジアにおけるキリスト教宣教師やその関係者などの活動が大きく関係していることを明らかにした。さらに、その呼称のヨーロッパへの伝播と普及の過程と、19世紀以降における蘭学を通じての日本への逆輸入および普及の過程を明らかにした。

一方、第6章「行基菩薩説大日本国図の地理的知識とその系譜―近世初期日本図刊行史の一断面―」では、近世初期にいくつかの異版のもとで刊行された行基菩薩説大日本国図について、料紙や版木などの媒体（素材）レベルの問題の検討と地理的知識としての地名の検討から各異版の関係を考察し、これらの異版の関係がこれまでいわれてきたような単なる地名の補充程度のものではなく、版木を異にするばかりか、別系統の日本図の情報を導入している版もあることを明らかにした。また、記載地名や図像の比較検討から、行基菩薩説大日本国図が大日本地震之図（寛永元年図および神戸市博蔵図）と強い系譜関係のあることを論証し、近世初期日本図の刊行史の一断面をとらえた。

付論2「万国総界図の系譜と『越中後』」も、こうした観点から万国総界図に記載された「越中後」という特異な島を追跡し、この世界図を万国総図の普及版とする従来の見解に疑問を呈し、『方輿勝略』や『輿図備考』に掲載された両半球図などに独自に依っていることを論証した。同時に、この図が坤輿万国全図を直接には原図にしていること、東アジアに関して万国総図とは異なる表現があることを指摘し、この図を従来のように単なるマテオリッチ系世界図とすることはできないことを論じた。

また、付論3「日本海の島嶼と中世日本図」では、日本図に描かれた止々島、出羽沖の諸島、見附島、石見島などの日本海上の島嶼について、それらの地理的知識の意義と変遷について検討した。

第三部は、第7章～第10章がらなる。ここでは、序章で論じた図像分析と構図分析がとりわけ有効な中世絵図を対象として、その空間構成の特質と空間認識、さらには描かれた地域空間について論じる。

第7章「日根野村絵図の空間構成と空間認識」では、ほぼ同地域を描く2葉の日根野村絵図をとりあげる。まず、荒野開発という主題を絵図表現について確定し、既開発地と未開発地という対比的構図を剔出する。一方、記号の配置等から日根野村の内と外とを対比的に描く構図を見出し、日根野村の人々の空間認識と位置づけた。これらの構図をもとに両図の構造をモデル化して把握した。

第8章「鶴見寺尾絵図の空間構成と地域空間」では、図像の示差性や表記方向などの検討によって、本堺堀の区画性とそれを越えて広がる〈ミソー鑑窪〉付近の領域性という相矛盾する表現を、この絵図を特徴づける表現として検出した。一方、田の記号の分析によって、台地を中心とする本堺に囲まれた寺領への、寺領外からの耕地開発の侵攻を読みとり、前述の矛盾もこうした状況を生み出す前提として位置づけ、その結果として新堺押領にいたったことを指摘した。

第9章「慧日寺絵図の空間構成と景観」では、絵図上に再構成された空間が中心と周縁とで著しく異なっているために非均質な空間になっており、それが図像表現の個別化と類型化にも関連することを指摘した。また、描かれた景観にも注目し、慧日寺の立地が新橋川への架橋ポイントや湧泉の存在と強く関連していること、太平洋側と日本海側を結ぶ交通路の要所に位置すること等を読解した。さらに、慧日寺の退転した姿を描く元禄2年の図との比較から、環境変化とならんで水利用の変化すなわち關伽井の聖なる水から灌漑用水への変化を指摘し、それが境内空間の変質すなわち聖域から世俗空間への変化

にともなうものであることを指摘した。

一方、第10章「中世絵図に描かれた景観要素—交通施設を中心に—」では、主要な荘園絵図30点をとりあげて、交通施設に焦点を絞って通絵図の検討を試みた。これらの絵図では陸上交通の記載が広くみられることがら道と橋の記号化について検討し、6タイプの道の図像と5タイプの橋の図像を分類し、それぞれが規模や機能の階層によって描き分けられていることを指摘した。また、記名された道が主題に関連したりベースマップの重要な枠組みになっていることを指摘した。さらに、幹線道路に沿う都市的集落とそれから離れた小道によって結ばれる農村集落という、道の階層と集落の機能の関係に関する空間的パターンを絵図から読解した。

第四部は第11章～第13章および付論4からなる。ここでは荘園絵図の主題とそれに関わる景観表現、とりわけ境界について論じる。その際、これらが現実的な要請のもとに作製されている点を考慮して、境界の現実世界における位置すなわち現地比定についても注意を払う。

第11章「足守荘絵図における空間定位と境界」では、まずこの絵図の主題である勝示を現地比定し足守荘の荘域を推定した。とくに、平地のなかに打たれた「未申勝示 堤田一条六丁作人永宗坪」については、ほぼ同時代に隣接する服部郷図の検討からその特異な呼称法を確認し、それによってその位置を正確に確定した。また、これによってこれらの勝示の設定原理が条理地割を基準とする空間定位に依っていることを明らかにした。一方、こうした四至勝示という形式地域的な境界表現に対して、展開図的な領域表現がみとめられることを読解し、それを実質的地域に基づくものとした。

第12章「奥山荘波月条近傍絵図の景観と境界」では、この絵図が新旧の太伊乃河を中心とした構図で描かれていることを確認し、その新旧の流路を復元した。そこでは、河川と集落のいずれかを固定して復元する従来の説を退けて、扇状地という特性を踏まえて双方とも移動しうるという立場に立ち、空中写真判読や小字名の検討等によって新たな復元案を提示した。また、絵図に描かれた景観とりわけ主題に関わる景観が、この絵図と一体のものと考えられてきた文書（建治3年4月讓状）の記載する景観とは必ずしも一致しない点に注目し、この境界相論に流路変化に関わる新たな課題が生じ、絵図の作製にいたった可能性を指摘した。

第13章「奥山荘と荒河保の境界」では、奥山荘と荒河保のあいだで交わされた正応5年の和与状と和与絵図に描かれた和与鏡の検討を中心として、荘と保全体の境界を復元した。絵図については、地形表現や地名の階層等に留意して全体の詳細な現地比定を行うことを通じて和与鏡を復元した。その結果、これまで定説とされてきた「土沢の勝示石」が表現範囲外であることも立証した。一方、和与状についても、円山の確定と黒沢沢・吉田入に関する新解釈など、境界表示の地物それぞれの比定に新たな知見を加えた。また、和与が荘と保のそれぞれのブロックごとになされていること、境界設定において灌漑用水の分配問題が焦点になっていること等を指摘した。

付論4「奥山荘と加地荘の境界」では、第13章をうけて、文書に記載された地名の検討によって、奥山荘の南の境界である加地荘との境界を復元した。これによって、西の日本海・東の出羽国境および第13章の結果とあわせて、奥山荘の全体の境界が明らかになった。

## 論文審査の結果の要旨

近代地図は一般に、空間を表現するための一定の図法や図式を備えているが、言語や楽譜のように読む順序が定まっていないために、その解読と利用の可能性は読者によって大きく異なる。前近代の地図（古地図）の場合、この図法と図式が定まっていないか、あるいは明示的ではないために、解読そのものにも困難を伴うことが多い。しかも、古地図が表現しているのは現実世界にとどまらない。このことが、古地図の解読をいっそう複雑なものにしている。

古地図研究は、この特質をふまえて、その解読と地理的知の析出を試みるのが本質的に重要な課題である。しかし、とりわけ中近世の古地図研究においては、古地図を特定の目的の資料として用いるか、そうでなければ不正確な段階から正確な地理的知の表現を獲得して近代地図に近づく単一の過程に位置づけるものが多かった。

論者は、本質的な課題に接近するために、古地図の構図と地図記号を主たるテーマとして論じており、この2つのテーマ設定は有効である。論文全体は4部に分たれ、計14の章と4つの付論で構成されているが、大きくは、中近世の日本図の構図を主要テーマとした部分と、中近世のいわゆる荘園絵図を対象とし、そこに表現された景観・空間・境界を解読しようと

した部分から成る。

構図研究の視角からは、いわゆる行基図を含む各種日本図の縁辺に描かれた異界・異域の追跡がまず展開される。北方の「雁道」、「小人国」などを日本図の構図の中に丹念に追い（前者37例、後者15例）、鳥追い歌の地域と鳥追いの方向、蝦夷の位置と表現、南方の羅刹国（36例）、八丈島および海中の「黒瀬川」の認識などを例として、日本図の中の想像力の世界やそれらの系譜と変容をたどる。

さらに、日本の国土の形状と日本海という呼称をとりあげる。中世以来の日本図では、国土が基本的に東西方向の陸地として表現されていたが、次第に東北地方が立ち上がり、日本海が想像の海から現実の海へと変容する過程を描出する。この途上における蝦夷の位置や形状の変遷、「越中後」という奇妙な島の出没する状況を指摘する。

また、188例の地図を検討し、日本海という呼称の初見が、マテオ・リッチの坤輿万国全図（1602年刊）であることを確認し、内外の地図における表現例を整理している。その上で、日本海の呼称に出会ったと推定されるマカオにおけるマテオ・リッチの周辺、それ以後のその呼称の受容のプロセスを追跡する。日本においては、日本近海の表現について、坤輿万国全図の受容、ラ・ペルーズ、クルーゼンシュテルン等西洋版地図の受容の状況が、高橋景保や石川流宣などの地図作製者、蘭学系学者などのそれぞれの立場や主張によって差異のあることも指摘している。これらの丹念な整理と指摘は、従来の個別的・選択的なレベルを越えて、新たな検討基盤を構築している。

一方、荘園絵図類の研究においては、まず、日根野村絵図において作製者の側からみた内と外の構図を析出し、ついで、鶴見寺尾絵図、慧日寺絵図の分析と現地比定の明確化を行うと共に、それらの景観表現とその記号化の状況の解説を行っている。

さらに、足守荘絵図、奥山荘波月条近傍絵図、奥山荘と荒河保境界和与絵図の事例研究を展開する。いずれも、史料としての絵図の分析、とりわけ作製目的やその背景の析出に立脚して、現地調査にもとづいた現地比定を行っており、従来の現地比定の修正や新たな現地比定に成功している。これら自体が、事例研究の進展に寄与していることになるが、さらにこれらの事例においては、これらの絵図に「現実の生活空間がベースマップとして表現されている」と見て、詳細な現地比定研究に立脚して、景観表現と記号化の方向について論じている。

以上のように本論は、日本図研究においても、荘園絵図類の研究においても、個別の指摘自体が意義のあるものであるが、その基盤となっている資料の丹念な集積が一つの特徴であり、価値あるものといえよう。例えば、1つの雁道の表現は日本図における奇妙な存在に過ぎないが、そのような例が集積され、整理されて系譜が判明することにより、想像の世界の一端が解明されることになる。日本海という呼称についても同様の手法が採用されており、いずれも一定の成果に結びついている。

本論の前半における中近世日本図の構図をめぐる研究では、国土としての日本の表現とそれをとりまく異界・異域からなる、いわばエスノセントリックな構図のあり方を析出し、日本図のコスモロジカルな構図を描出した点が成果である。従来は、個別の奇妙な存在、あるいは大日本国地震之図などに見られる特殊な表現に注意が払われてはいたものの、その全体的な構図を十分に描出し得ていなかった。

後半の成果は、それぞれの対象が事例研究の推進に寄与したことに加え、景観表現と記号化、空間表現の構図の観点からの対比という、類型化の段階に接近し始めたことにある。図式が明示的ではない中世絵図類は、換言すれば、一つ一つが極めて個別性の大きい表現から成っていることになり、俄に共通の図式を抽出し得るものではない。しかし、論者が強く意識する記号化は、表現法・地図化の主要な要素であり、その類似性・類型性の追求は不可欠の研究過程だからである。

以上のような意義は認められるものの、本論文が依然として個別研究の集積の段階からは十分に脱していないことに問題が残る。その背景には、本論を構成する各事例研究が、30年程の間の多様な機会に行われたことが関わっている。しかも、各事例研究の対象となった古地図は、きわめて個性の大きな表現法を有しており、個別的理解を基礎とすることが不可避な状況であることも大きな要因である。しかし、このテーマを設定した以上、さらに踏み込んだ論述が期待される点でもあり、その方向性を強く意識している論者の今後の研究の一層の進展が待たれる。本論は、古地図の構図と記号化という重要な論点に大きく踏み込んでおり、その分析視角の有効性を示していることから、その達成の期待は大きい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年2月24日、調査委員3名と専門委員1名が、論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。